

蛋白質の摂取量は70.2グラムで前年に比べ殆んど変化なく、うち動物性蛋白質は27.1グラムで前年より僅かに伸びがみられるが、前年まで上昇をつづけてきた脂肪は26.3グラムで却って減少している。

カルシウムの摂取量は最近大きな増減は認められないが35年は391ミリグラムで僅かながら増えている。

またビタミン類についてはB₁が前年と変りないのを除くと、A、B₂、Cともに(－)8.9%(－)1.4%(－)5.3%と減少している。これらビタミンは調理による損失を考慮すると更にその不足は著しいものがあり今後の上昇が望まれる。

事業経営者世帯

この世帯における摂取熱量は2,067カロリーで前年の2,100カロリーに比べ相当に減少している。また動物性蛋白質、カルシウムは殆んど増減はないがビタミンB₁、B₂、Cは若干ながらも減少しており、前年度にかなりの向上を示したこの世帯における栄養水準も本年は逆に低下の現象を示している。

常用勤労者世帯

摂取熱量は2,042カロリーで前年より僅かに増加しているが脂肪、動物性蛋白質、カルシウムは全体的に若干上昇しビタミン、A、B₁、B₂、C等ビタミン類はすべて低下している。この業態は毎年全業態中最も栄養摂取量がすぐれていたが本年は伸び悩みを示している。

日雇・家内労働者世帯

摂取カロリーは2,074カロリーで消費者世帯のうち最も高いが、その他の栄養素の摂取状態をみると動物性蛋白質、脂肪、カルシウム等の摂取量は最も低い。これを前年に比較すると動物性蛋白質、カルシウムが若干伸びているだけで、ビタミン類はすべて減少しており、栄養水準は極めて低い。

その他の消費者世帯

この世帯の摂取熱量は2,019カロリーで全業態中最も低く、その栄養状態は、日雇・家内労働者世帯に次いで悪い。本年は動物性蛋白質、脂肪、カルシウムは殆んど変化がなく、ビタミン類はすべて減少を示している。

ハ) その他の世帯

その他の世帯は熱量、蛋白質の総量は前年と大差はないが動物性蛋白質、脂肪は(+)8.1%、(+)6.3%とそれぞれ増加している。

なお、この世帯の栄養状態は生産者世帯と比べると動物性蛋白質、カルシウムが若干多いだけで脂肪、その他ビタミン類は劣り、また消費者世帯と比べては熱量、カルシウム、鉄、ビタミンB₁、Cがややすぐれているが蛋白質、動物性蛋白質、脂肪、ビタミンA、B₂は劣っており、一般に栄養状態はかなり低い水準にある。

2. 食品群別摂取量

この2～3年、国民の生活は所得の増加、生活水準の上昇を反映して、洋風化、簡易化の方向にあるが、食生活にあっても食糧消費の傾向が変りつつあり、食糧事情の好転と共にその消費形態も穀類が全体的に減少し、肉、卵、乳、魚介類、洋菜類が増加するなど従来の穀類偏重から抜けだしつつある傾向がみられる。

また特に最近では生活様式を簡素化しようとする風習が強くなり家事労働の節約のため調理の簡単な加工

食品、そのまま食べられる即席食品、嗜好食品の増加が著しくなってきた。

しかしながら表面的に嗜好の充足という点で大きく変わりつつあるようでもその食糧消費水準はまだまだ低く、そのテンポも都市農村別、所得階層別、職業別、地域別等によってかなりの差異が認められる。次に昭和35年度成績について特色あるものをあげてみると穀類は全体に減少を示し、そのうち昭和30年からの豊作を背景にして、ここ数年上昇しつづけてきた米の摂取量が減少を示したことが目立っており、特に生産者世帯では前年に比べ3.3%の減少が認められた。

また魚介類、肉、卵類、乳類も前年に引つづき順調に伸びているが、本年は生産者世帯の向上が著しく前年に比べて魚介類3.8%、卵類17.0%、乳及び乳製品27.1%と増えたほか柑橘類、トマトも15.0%とその摂取量は増加している。

消費者世帯にあっては前年に比べ魚介類4.5%、卵類8.1%、乳および乳製品7.5%の増加が認められたが、その反面前年まで漸増の傾向にあった油脂類、獣鳥肉類が4.5%、4.6%と減少し、その動きは伸び悩み状態にあるといえよう。

しかし、都市農村を問わず全国的に緑黄色野菜は年々激減しており、本年も9.5%と減少していることは誠に憂慮すべきことである。

緑黄色野菜としては、ピーマン、にんじん、ほうれん草、かぼちゃ、しゅんぎく、緑色部の多いねぎ、大根葉、うぐいす葉、小松菜などがあげられるが、これらはセロリー、アスパラガス、レタス等の洋菜類に比べて、目新らしさが少なく煮たり、茹でたりして調理に手間のかかることなどから最近の食生活の洋風化、簡便化を反映して敬遠されているものと思われる。

しかし、わが国の如く動物性食品の資源に恵まれず、ビタミン類の多くを緑黄色野菜に依存する現状にあっては、何としても緑黄色野菜の十分な摂取が望まれるのである。

1) 全国1人1日当り食品摂取量

これまでは食糧の消費内容の変化について述べてきたが、更に34年に栄養審議会が策定した昭和37年の目標値と比較してみると第7表のとおりである。

すなわち穀類中米の摂取量は358.4グラムで前年より若干減少が認められるものの昭和37年の目標値を8.6%も上回るなど過剰摂取となっている。

しかし、大麦は28.2グラム、小麦65.1グラムで昭和37年の目標値を29.5%、18.6%と各々下回っている。

いも類はその他のいも類20.1グラムで、目標値をようやく充たしているものの甘藷、馬鈴薯は43.0%、31.7%の不足となっている。油脂類の摂取量は6.1グラムで目標値を49.2%も下回っている。豆類は71.2グラムで7.5%の不足、また最近摂取量の増加してきた動物性食品も147.4グラムの摂取量で、目標値を20.8%下回っている。

次にここ数年減少の著しい緑黄色野菜は39.0グラムで目標値を51.2%も下回っている。

その他の野菜は11.7%、柑橘類、トマトは15.0%、その他の果実22.7%の不足となっている。

このように昭和37年を目標とした食糧構成と現実の摂取量とを比較すると若干の食品を除き何れも目標を下回っている。特に栄養的に重要な食品である乳類、緑黄色野菜が不足していることは今後ともこの方面に栄養改善の重点を向けなければならないことを示している。

(イ) 穀 類

食 品 群 別			栄養審議会が策定した昭和37年の目標(a)	昭和35年の国民栄養調査成績(b)	(b)/(a)
		米	330 g	358.4 g	108.6
穀 類	大 小	麦	40	28.2	70.5
		麦	80	65.1	81.4
		雑 穀	2	1.0	50.0
堅 果		類	0.7	0.5	71.4
い も 類	甘 馬 鈴	薯 蓣	30	17.1	57.0
		薯 蓣	40	27.3	68.3
		その他のいも類	20	20.1	100.5
砂 糖 類	砂	糖	15	12.3	—
		加工品に含まれる砂糖	15		—
油 脂 類	油	脂	6	6.1	—
		加工品に含まれる油脂	6		—
豆 類	大 味	豆 噌	2	1.5	75.0
		豆 噌	28	26.0	92.9
		大豆製品	40	37.3	93.3
		その他の豆類	7	6.4	91.4
動物性食品	魚 介 類	魚 介 類	80	76.9	96.1
		獣 鳥 肉 類	20	18.7	93.5
		卵 類	16	18.9	81.9
		乳	70	32.9	47.0
野菜及び果実	緑 黄 色 野 菜	緑 黄 色 野 菜	80	39.0	48.8
		その他の野菜	140	123.6	88.3
		柑橘類およびトマト	30	25.5	85.0
		その他の果実	70	54.1	77.3
海 草 類		(乾物として)	3	4.7	43.3
醬 油			30	28.1	93.7
	計		1,200	1,029.7	85.4

戦後15年、食生活の内容もいろいろと複雑な動きを示しながら食糧構成の多様化が進んできたが米食偏重の厚い壁は依然として崩れないものの、穀類の総量としては全体に減少の傾向にある。このことは将来のわが国の食生活が澱粉性食品を中心とする単調な食事形態から漸次脱皮することを意味するものであろう。

なおこのような穀類の消費内容の変化を促進したものは何としても史上最高とされる昭和30年からの米の大豊作があげられる。

例えば昭和25年には63.9グラム摂取されていた大麦は昭和30年の米の豊作により米の消費が急激に増加

したため、大麦は41.5グラムと大きく減少し、その後も年々減少の傾向をたどり本年は28.2グラムと激減している。一方31年から上昇しつづけてきた米の摂取量は前年は364.4グラムと戦後最高を記録したが、本年は358.4グラムで若干の減少を示している。

米

わが国の農業生産は米作中心に発展し、しかも国民の食習慣は米に対する執着が強く、そのため最近の如く米の供給量が多くなり所得が上昇するにつれ食生活の向上は米食率の増大という形で現われる特殊な

第8表 穀類の摂取比率(年次推移) 単位=%

年 度	24年	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
総 数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
米	70.4	71.0	71.5	73.3	73.2	72.1	72.3	76.6	76.6	76.9	78.8	79.2
大 麦	13.3	13.4	12.0	11.7	10.8	11.7	12.5	8.7	9.9	8.6	7.2	6.2
小 麦	13.9	14.4	15.4	14.1	15.1	15.4	14.2	13.9	13.0	14.2	13.8	14.4
雑 穀	2.4	1.2	1.1	0.9	0.9	0.8	1.0	0.8	0.5	0.3	0.2	0.2

発展過程をとげてきた。

従って全体に減少の傾向にある穀類の消費構成の中であって、今まで供給量の不足から抑制されていた内地米に対する需要が高まり米食率は昭和31年より急速に高まり35年には戦後最高の79.2%を記録するに至った。しかし摂取量としては本年は358.4グラムで若干減少を示した。

大 麦

戦時中から戦後にかけての食糧難を緩和するに大いに役立った大麦は生活水準の上昇と食生活様式の変化によって漸減の傾向にある。

すなわち昭和30年までは減少したとはいっても、なお55~60グラム摂取されたのが昭和31年には41.5グラムと大きく減少を示し、更に本年は28.2グラムで前年の33.3グラムに比べ15.3%も減少した。このような傾向は将来ますます強くなり食糧としての大麦の消費は減少する一方と考えられ今後はむしろ飼料としての用途に向けられるものと思われる。

小 麦

小麦の摂取量は65.1グラムで前年の63.7グラムに比べて僅かに増加しているがその内訳は生めん、ゆでめんの伸びでパンはこのところ伸び悩みの傾向にある。

また穀類中に占める小麦の割合は昭和35年には前年より若干増加し14.4%となっている。

雑 穀

穀類としての雑穀は嗜好の変化、米の豊作等の影響により年々減少の傾向にあり今後食品として伸びる見込みは殆んどなく飼料として用いられることになろう。本年の摂取量は1.0グラムである。

(口) い も 類

いも類の摂取量は64.4グラムで前年の66.7グラムに比べ3.4%の減少となっている。特に最近では嗜好の変化に伴って漸減の傾向をたどっている。

しかし僅かに馬鈴薯が副食としてもかなり利用されるようになってきた為か、前年より若干増加してい

る。

甘 藷

昭和24年には代替食糧として108.3グラム消費された甘藷も食糧事情が緩和するに従って漸減し前年は18.5グラム、本年は17.1グラムとその減少は著しい。

馬 鈴 薯

馬鈴薯の摂取量は27.3グラムで前年に比べ3.3%と僅かに増加している。

(ハ) 砂 糖 類

最近の砂糖の摂取量は33年12.3グラム、34年に12.5グラムと若干増加の傾向にあったが本年の摂取量は12.3グラムでやや停滞している。

(ニ) 油 脂 類

ここ数年油脂の摂取量は順調に増加しており、昭和35年の摂取量は6.1グラムで前年の5.8グラムに比べて5.2%の増加となっている。

しかし今後国民が澱粉性食品を主体とする、単調な食生活から脱脚するためには、熱効率の極めて高い油脂類の大幅な増加が必要であり、一層の摂取増が望まれる。

(ホ) 豆 類

豆類の摂取量は昭和24年には49.8グラムであったものが逐年増加して30年には72.7グラムと上昇したが、ここ数年の摂取量は停滞気味である。

品目別にみると大豆、味噌は減少し大豆製品は増加している、本年の摂取量は71.2グラムである。

(ヘ) 動物性食品

最近の食生活は全体的に穀類が減少し、動物性食品が増加する方向に変わりつつあるが、その量は魚介類を除くと獣鳥肉類19グラム、卵類18.9グラム、乳および乳製品32.9グラムであり、欧米諸国のそれと比較するとまだ相当な隔りがある。

昭和35年の動物性食品の摂取量は147.4グラムで前年の136.1グラムに比べて8.3%の増加を示している。このうち特に大きく伸びたのは魚介類5.9%、卵類4.5%、乳および乳製品が22.3%となっている。

第9表

動物性蛋白質の摂取構成

単位=%

年 度	総 量	魚 介 類	獣 鳥 肉 類	卵 類	乳および乳製品
28 年	100.0	82.4	9.9	5.9	1.8
30 年	100.0	79.7	11.3	6.8	2.2
32 年	100.0	75.9	13.4	7.3	3.4
34 年	100.0	69.7	16.2	9.0	5.1
35 年	100.0	68.7	15.7	10.0	5.6

このように動物性食品の中でも、畜産食品の如く年々増加傾向にあるものと、魚介類の如く停滞の傾向にあるものとに別けられるが、これは動物性蛋白質の全量を100とした摂取構成表(第9表)をみるとはっきりと表われている。すなわち28年には魚介類は動物性蛋白質の82.4%を占めていたが35年には68.7%に減少し、替って、獣鳥肉類、卵類、乳および乳製品の増加が目立っている。

魚 介 類

わが国は水産資源に恵まれている関係で動物性蛋白質は主として水産物、特に魚介類に依存してきたのであるが、最近では国際的に漁獲制限が年々きびしくなり漁船の活動範囲は縮められてきている。しかし漁船装備の近代化、技術の進歩によって漁獲量は戦前よりも増加しており、その摂取量は動物性食品中50%以上を占めている。

ただ最近では食生活の簡素化の影響で畜産食品の伸びが大きく魚介類は調理に手間のかかること、あまり貯蔵できないこと、更には、国民の嗜好の変化等によって特に生鮮形態での消費は減少する傾向にある。しかし、その反面各種練製品、加工品の消費は増加している。

例えば本年における魚介類の摂取量は76.9グラムで前年に比べ5.9%の増加を示したが、これは魚肉ソーセージ、かまぼこ、はんぺん等の練製品と缶詰、佃煮等の加工品が前年に比べ各々19%、12%と大幅に増加したため、この傾向は今後更に強くなるものと思われる。

獣 鳥 肉 類

戦後動物性食品の中で畜産食品はその消費量が急激に増加したものの一つであるが、本年の摂取量は18.7グラムで前年の18.5グラムに比べて殆んど伸びはみられない、これは34年後半から35年にかけて価格が急騰したためと思はれる。

獣鳥肉類の内訳は牛肉4.9グラム、豚肉3.8グラム、その他の肉類加工品が10.0グラムとなっている。

卵 類

昭和35年の卵類の摂取量は18.9グラムで前年の16.5グラムに比べ14.6%の伸びを示している、畜産食品の中では乳類に次いで順調に上昇している。

乳 類

ここ数年最も顕著に伸びている食品で昭和24年には4.1グラムで動物性食品中6.0%を占めるにすぎなかったものが、本年度においては32.9グラムとなり前年に比較して15.4%の上昇を示している。

乳類のうちその大半は生乳として消費しており、昭和35年には動物性食品中に占める乳類の割合は22.3%となっている。

(ト) 野 菜 類

最近の食品の消費形態は穀類の減少、動物性食品の増加という形で変化しているがビタミンの給源として重要な野菜類の摂取はあまり増加せず、中でも栄養価の高い緑黄色野菜は年々減少の傾向にあることは好ましくない。

すなわち緑黄色野菜の昭和35年における摂取量は39.0グラムで前年の43.1グラムに比べて(一)9.5%と大きく減少している。

このことは嗜好の変化もあって、同じ野菜でも栄養価の低い白色の洋菜類を摂取するようになったことが原因になっていると考えられる。

次に野菜類消費の内訳をみると、緑黄色野菜39.0グラム中、にんじん7.9グラム、ほうれん草10.3グラム、かぼちゃ7.0グラムその他13.8グラムとなっており、各食品とも前年に比べ減少している。

その他の野菜類では大根が23.5グラムで最も多く、ついで、はくさいが15.1グラム、きゃべつ13.5グラムその他71.7グラムとなっている。

(子) 果 実 類

果実類は食生活様式が洋風化するに従って今後もっとも伸びるものと考えられるが、本年度における摂取量は柑橘類・トマト25.5グラム、その他の果実54.1グラムで柑橘類・トマトは前年に比べ(+)8.1%と大きく伸びているが、その他の果実は停滞気味となっている。

2) 業態別1人1日当り食品摂取量

食品摂取量を業態別にみるとまず生産者世帯にあっては自家生産物に依存する割合が高く、食品の種類、質的内容が、消費者世帯に比べて著しく低水準にある。しかしながら本年は米を含む穀類が若干減少し動物性食品、油脂類も大きく増加して、ようやく向上の兆をみせてきた。これに対し消費者世帯は魚介類、卵、乳類は増加しているが、前年まで上昇をつづけてきた肉類、油脂類が減少し、また緑黄色野菜は前年に引続き大幅に減少する等一般に伸び悩みの傾向にある。

消費者世帯の中で食糧構成が最もすぐれているのは常用勤労者世帯で事業経営者世帯がこれに次いでおり、生産者世帯を大きく引離している。

しかし、消費者世帯の中でも低所得階層と考えられる日雇・家内労働者世帯は全業態中米の摂取量が最高で他の動物食品、野菜、果実類は少なく食糧構成は非常に低い水準にある。

イ) 生産者世帯

生産者世帯の食糧構成は前年に比べ僅かながらも改善されつつあり前年は摂取カロリーの78.7%、蛋白質の62.6%が自家生産物に依存する状態であ

第10表 業態別食品摂取状況の比較

1人1日当り g

食品群別	消費者世帯 (a)	生産者世帯 (b)	(b)/(a) %
米	346.6	382.8	110.4
大 麦	17.3	44.3	256.1
小 麦	73.9	52.1	70.5
甘 藷	10.7	25.7	240.2
馬 鈴 薯	22.5	35.8	159.2
砂 糖	12.1	12.7	105.0
油 脂	6.4	5.6	87.5
味 噌	23.2	30.7	132.3
大 豆 製 品	42.9	28.0	65.6
魚 介 類	81.6	67.8	83.1
肉 類	24.8	9.0	36.3
卵 類	22.6	13.1	58.0
乳 類	37.3	27.1	72.7
緑 黄 野 菜	33.9	48.0	141.6
そ の 他 野 菜	111.8	141.9	126.9
柑 橘 類	30.6	17.6	57.5
そ の 他 の 果 実	56.7	51.6	91.0

たが、本年は74.3%、59.2%と下がり、全般に食糧構成は向上している。

すなわち生産者世帯の米の摂取量は382.8グラムで消費者世帯より36.2グラム多いが前年に比べて(-)3.4%減少している。大麦は(-)6.5%減小を示したが小麦、雑穀は僅かに増加がみられる。なお小麦の増加はめん類の増加によるもので小麦粉、パンの消費はむしろ減っている。

いも類は他の業態が前年に引きつづいて減少している中において生産者世帯のみは(+)3.5%の増加となっている。これは馬鈴薯の摂取量が35.8グラムで対前年に比べ(+)24.3%と大幅に伸びたことによるものである。

油脂類は前年まで消費者世帯に比べて著しく摂取量が少なかったが本年は(+)21.7%増加し、5.6グラムとなった。豆類は68.3グラムで僅かに増加しているが、味噌は漸減の傾向にあり、大豆製品、その他の豆類は増えている。

動物性食品は116.9グラムで前年に比べて(+)9.6%の摂取増を示したが食品別には卵類、乳類がそれぞれ(+)17.0%、(+)27.2%と増大したことが目立っている。

柑橘類、トマトは17.6グラムで前年に比べ(+)15.0%増加しているが、増加したといってもまだ全業態中最も少ない。

以上生産者世帯の食糧消費形態は相当に上向いてきたようであるが、ビタミンの重要な給源である緑黄色野菜、その他の野菜類、その他の果実類がともに漸減の傾向にあることは好ましくない現象であるといえよう。

消費者世帯

消費者世帯は他の世帯群に比べるとその食糧構成はかなり上位の水準にあるがこの1~2年は伸び悩みの傾向にある。すなわち、動物性食品のうち、魚介類、卵類、乳類は前年に比べそれぞれ(+)4.5%、(+)8.1%、(+)7.5%と増加しているが、油脂、肉類は(-)4.5%、(-)4.6%と減少している。

米の摂取量は346.6グラムで前年に比べ僅かに増加しており、その他大麦、小麦等の穀類はすべて減少している、小麦のうち食品別にはパンは減少しめん類が僅かに増加しているが米の摂取量が増加すると直ちにパン食、粉食などに反映してくることを示している。

いも類は前年に比べ(-)5.0%減少し食品別にみても甘藷、馬鈴薯、その他のいも類はすべて減少し、他の世帯群に比べてもいも類の摂取は最も低い。

動物性食品は何れも他業態を上回っており本年の摂取量は166.2グラムでその内訳は魚介類81.6グラム、獣鳥肉類24.8グラム、卵類22.6グラム、乳および乳製品37.3グラムとなっている。

また野菜、果実類の摂取量をみると緑黄色野菜、その他の野菜はともに他の業態を下まわっているが柑橘類・トマトの消費は他の業態を大幅に上回っている、昭和35年の緑黄色野菜の摂取量は33.9グラムで前年に比べ11.3%の減少であり、その他の野菜は111.8グラムで若干増えているが、柑橘類・トマトは30.6グラムで前年の摂取量と同じである。

一般にこの世帯における食品摂取量の伸びは他業態に比べて小さく停滞気味の状態にある。

次に各世帯群別に消費内容を検討してみよう。

事業経営者世帯

この世帯群の食品摂取量は一般に向上している。まず米の摂取量は355.6グラムで前年の362.5グラムに比べて(-)1.9%と若干減少し、動物性食品は166.4グラムで前年の159.1グラムに比し(+)4.6%の増加でそのうち魚介類が(+)5.5%増加したのが目立っている。その他卵類乳類もそろって上昇の傾向にある。緑黄色野菜は34.2グラムで消費者世帯中最も多いが前年に比べると(-)22.3%と大きく減少し、その他の野菜類も119.5グラムで(-)5.8%の減少を示している。

しかし全体的にみると次に述べる常用勤労者世帯に比較して僅かに見劣りするが、日雇・家内労働者世帯、その他の消費者世帯に比べると上回った水準にある。

常用勤労者世帯

全業態中穀類の消費は最も少なく本年の摂取量は428.1グラムで、ここ数年漸減の傾向にある。いも類は45.3グラムで事業経営者世帯よりも僅かに多い。昭和35年度成績では米の摂取量が若干増加し、果実野菜類の消費が低下しているが、特に緑黄色野菜の減少が目立っている。動物性食品と果実類は業態中最も

多く食糧の質的構成は最も上位にある。

日雇・家内労働者世帯

穀類の消費が業態中最も多く特に米の摂取量は385.4グラムで生産者世帯のそれを上回っている、いも類は前年まで穀類と同じく消費量は多かったが、本年は米の摂取量が上昇したためか、大幅に減少して消費者世帯中最も低い44.3グラムとなっている。

魚介類は、ここ数年、摂取量が多くなっているが、他の動物性食品、油脂、果実類の消費は非常に少なく、食糧の消費水準は低位にある。

動物性食品は漸増の傾向にあるが、その殆んどは魚介類であり、果実類、緑黄色野菜は減少している。この日雇・家内労働者世帯と栄養状態の最もすぐれている常用勤労者世帯との食品摂取量を比較してみると、第11表のとおり大麦、甘藷等の消費が多く、砂糖、油脂、畜産食品、果実類等いわゆる高級食品と称せられるものは、約半分の量しか摂取していない。

その他の消費者世帯

この世帯の食糧構成は、日雇、家内労働者世帯をかなり上回っているが、他の消費者世帯に比べると劣っている。

昭和35年度食品摂取量は穀類、油脂、魚介類を除く他の動物性食品、野菜、果実類等はすべて減少し全般に伸び悩みの状態にある。

第11表 常用勤労者世帯と日雇・家内労働者世帯の食品摂取量の比較
1人1日当り g

	常用勤労者世帯(a)	日雇・家内労働者世帯(b)	(b)/(a)
米	337.3	385.4	114.2
大 麦	16.0	36.9	230.6
小 麦	74.6	55.3	74.1
甘 藷	5.7	9.9	173.7
馬 鈴 薯	26.1	21.2	81.2
砂 糖	13.4	7.9	59.0
油 脂	7.7	4.2	54.5
大 豆 製 品	37.1	36.6	98.7
魚 介 類	79.4	82.2	103.5
肉 類	26.0	13.5	51.9
卵 類	27.3	14.4	52.7
乳 類	38.3	17.7	46.2
緑 黄 野 菜	33.5	31.2	93.1
そ の 他 野 菜	117.8	119.0	101.0
柑 橘 類	23.0	9.0	39.1
そ の 他 の 果 実	28.7	11.8	41.1

その他の世帯

この世帯は生産者世帯、消費者世帯のいずれにも分類されない世帯をとりまとめたもので、職業形態もいろいろで比較的固定しない対象が多いため年次別にみると非常に変動が激しい。

穀類の消費は消費者世帯と大差はないがその内容は大麦が多く、小麦が少ない特異な消費形態を示している。昭和35年度成績では動物性食品、油脂類、豆類の伸びは消費者世帯を上回っている。しかし食糧構成は依然として消費者世帯に比べて極めて低い状態におかれている。

3. 食品群別栄養構成

(熱量および各栄養素の摂取比率)

これまでは各栄養素の摂取量、或は食品摂取量について、いろいろの観点から記述してきたが、更に食品群別に熱量、および各栄養素の供給構成について検討してみよう。

1) 熱 量

昭和35年度における熱量摂取構成をみると依